



I. 導入

おはようございます。先週は、悔い改めについてお話ししました。ヨナ3:5にはこうありました。「すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった。」ニネベの王までもがへりくだり、自らの罪を悔い改めました。また、ニネベの民にも悔い改めるよう命じました。これは、口先の謝罪ではありません。悔い改めを行動で示し、罪に背を向けたのです。

ヨナ3:10「神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくださのをやめられた。」神はニネベの人々にあわれみをかけてくださいました。この箇所から、誰でも悔い改めて神を求めるなら神は常に赦してくださると話しました。



この一連のできごとに対し、ヨナはどう反応するでしょう。ニネベの町全体が悔い改めるほど、自分の話に効き目があったと喜んだでしょうか。神の恵みあわれみを感謝するでしょうか。では、ヨナ4:1-9を見ていきましょう。

II. 聖書朗読 (ヨナ書4:1-9、新共同訳)

4:1 ヨナにとって、このことは大いに不満であり、彼は怒った。 4:2 彼は、主に訴えた。「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。 4:3 主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きているよりも死ぬ方がましです。」 4:4 主は言われた。「お前は怒るが、それは正しいことか。」

4:5 そこで、ヨナは都を出て東の方に座り込んだ。そして、そこに小屋を建て、日射しを避けてその中に座り、都に何が起こるかを見届けようとした。 4:6 すると、主なる神は彼の苦痛を救うため、とうごまの木に命じて芽を出させられた。とうごまの木は伸びてヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消え、このとうごまの木を大いに喜んだ。 4:7 ところが翌日の明け方、神は虫に命じて木に登らせ、とうごまの木を食い荒らさせられたので木は枯れてしまった。 4:8 日が昇ると、神は今度は焼けつくような東風に吹きつけるよう命じられた。太陽もヨナの頭上に照りつけたので、ヨナはぐったりとなり、死ぬことを願って言った。「生きているよりも、死ぬ方がましです。」 4:9 神はヨナに言われた。「お前はとうごまの木のことと怒るが、それは正しいことか。」彼は言った。「もちろんです。怒りのあまり死にたいくらいです。」

III. 教え

主がニネベの人々をあわれまれたことに、ヨナは腹を立てました。もともとタルシシュに逃げたのも、神がニネベの人々にあわれみをかけられるとわかっていたからだ、そんなことにはなっほしくなかつた、と言います。同時に、ヨナは厳しい暑さにも苛立っています。どちらも、自分の思い通りにならなくて怒っているのです。ヨナは快適な場所できつろぎながら、ニネベの滅ぼされる様を見たいと思っていました。しかし、ニネベは悔い改め、ヨナは炎天下でへたっていました。するとヨナは、死にたいと言い出します。



ヨナがニネベの人々の救いを望んでいなかったのは、とても残念なことです。また、熱いからといってそれほど怒るのも、みっともない話です。熱いのがいやなら、もっと涼しい場所へ移動すればよいだけのことです。町に戻ることもできたでしょう。悔い改めたニネベの民は、きっとヨナを歓迎して家や庭に迎え入れてくれたはずですが、けれどもヨナはそこに座って我慢します。怒るのをいいかげんやめて自分の置かれた状況を変える、という選択ができないのか、または、したくないのです。ヨナの最後のセリフは、「怒りのあまり死にたいくらいです。」でした。

ヨナに文句を言う筋合いはないように思えます。ヨナがタルシシュに逃げようとした時点で、神に裁かれる可能性もありました。しかし、神は絶え間ない恵みをもってヨナを追い求めてくださり、この機会を用いて船乗りたちに救いをもたらされました。ヨナが海で溺死するか、魚の腹の中で死んでしまう可能性もありました。しかし、神はヨナを救い出して、やり直しのチャンスを与えてくださいました。ニネベの人々は、ヨナの厳しい語り口を聞いて、彼を殺すこともできました。けれども、人々は自らの暴虐を悔い改め、ヨナを無事に去らせました。ヨナの使命は遂行され、あとは家に帰って休むだけです。

しかし、ヨナは家に帰らず、町の外でそのなりゆきを見届けようとしています。神が考え直してニネベの人々を滅ぼすのを期待しているようです。砂漠のたいへんな暑さにヨナは弱りますが、神は木を生えさせて、ヨナのためにその日一日、日陰を作ってくださいました。神は恵み深く、ヨナのことを辛抱されます。文字通りの意味でも、比喩的な意味でも、頭を冷やすために、一日くださったのです。次の日、神は虫に命じて木を食い荒らさせ、木は枯れます。神は、いいかげんにすねるのをやめて家に帰りなさいとヨナに言っておられたのではないのでしょうか。けれどもヨナは動きません。まだこだわって怒っています。そして、自分は怒って当然だと言います。このとき、ヨナは自分の態度を悔い改めて生きるより、死にたいと思うのです。

皆さんも、ヨナのようになったことがありますか。あまりにも腹が立ちすぎて、またはあまりにも憂うつで、死にたいと思ったことはありますか。多くの人にそういう経験があるのではないかと思います。平安を拒んで怒りつづけ、慰めを拒んでみじめでいつづけることを選んでしまう日があるでしょう。ときには、自己憐憫に浸って、恨みつらみを募らせることもあります。そんなときはたいてい、同じ思いが頭を駆け巡ります。ヨナはこんなふうに思っていたかもしれません。「あんなにひどい人たちの命を神様が助けるなんて信じられない。ニネベはずっと昔から私

たちの敵なのに。あの人たちは残酷で悪い人たちだ。偶像礼拝をする人たちだ。神様は何を考えているのだ。神の敵を救って、神の預言者である私にひどい仕打ちをするなんて。これまで長年神様に仕えてきたのに、陰を作ってくれる木さえ守ってくださらない。」ヨナのしていることは何でしょう。問題を並べ立てて、身の不幸を数え上げているのです。

皆さんもこんなことをしたことがありますか。怒りに悶々としながら、問題を並べ立て、身の不幸を数え上げたことがありますか。そういうことをしたことがある人は多いと思います。けれども、注意していないと、そういう態度から心に恨みが募ります。すると、人生の喜びが奪われ、うつ状態になり、自殺願望を持つようになるという負のスパイラルが生じます。心がそのように暗く孤独な状態である人も、今朝ここにおられるかもしれません。しかし、そこに留まる必要はありません。私たちは自由になれる。頭に駆け巡る思いを変え、祝福や感謝なことを数えることができます。主の助けがあれば、私たちは絶望の淵を脱し、平安と喜びを持って生きようになれるのです。



ヨナは、主の恵みあわれみを喜ぶこともできたはずでした。「ニネベの人々を神が赦してくださるなら、私の罪も赦してくださるはずだ」と、神を賛美して言えたはずでした。感謝すべきことを数えることもできたはずでした——神がやり直しのチャンスを与えてくださったこと、海で死なないように守ってくださったこと、ニネベでも安全に守ってくださったこと。次の日に木が枯れたことを怒るのではなく、神が丸一日木を与えてくださったことを感謝することもできたはずでした。ヨナは与えられた命、平安、そして自由を喜べたはずなのに、自分をあわれんで、死を考えました。

私たちの言動を決めるのは自分自身です。心の持ちようも決めるのは自分です。もし負のスパイラルにはまってしまっているなら、今日方向転換することをお勧めします。今までと違った選択をしましょう。問題を並べ立てるのではなく、感謝できることを数えてみましょう。頭の中で渦巻く思いを変えていきましょう。聖書箇所を暗唱したり、賛美の歌を心の中で繰り返し歌ったり、祝福を数えたりしてみてください。祈って助けてくれる人が必要なら、兄弟姉妹に相談しましょう。何より、時間をとって祈り、主に助けを求めましょう。箴言4:23 は次のように教えてくれます。「何を守るよりも、自分の心を守れ。そこに命の源がある。」



ヨナ書の最後には、ヨナの不平に対する神の応答が記されています。その後、ヨナの言葉は残されていませんが、最終的には神のおっしゃることがわかって悔い改めたのだと思います。ヨナが死ぬまで砂漠で座ったままいたのなら、このヨナ書自体存在していなかったでしょうから。いつかの時点で、神はヨナをとおして他の人を救っておられただけでないことにヨナも気づいたはずでした。神は、ヨナの上にも働いておられ、彼の心を変えようとしておられたのです。

私たちも人生でこういう経験をします。例えば、私の場合、ここOICで11年間牧師として奉仕する機会に恵まれました。私は完璧には程遠い人間ですが、主が私をとおして多くの方々に働いてくださったことは、たいへんな祝福ですし、謙虚にさせられます。また、神が絶え間ない恵み



をもって私を追い求めてくださり、年々この心を変えようとしてくださったことを思うと、さらに謙虚にならざるを得ません。正直なところ、ヨナのように私も逃げたいと思ったことがあります。ヨナのように、すねた態度だったこともあります。けれども、神の絶え間ない恵みが私をいつも追い求めてくださいました。

神は私たちのことをあきらめたりなさいません。私たちを追い求め、信仰と救いへと導いてくださいます。救われてからも、私たちは神への信仰と知識と知恵において成長する必要があります。神はそれも手伝ってください、私たちがイエスに似た者となれるよう助けてくださいます。ローマ8:29はこう語ります。「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。」罪の罰から救われるのは、私たちのうちにおける神の働きの序章にすぎません。私たちをイエス・キリストの似姿に変え、きよめようと働いてくださいます。その間ずっと、神は私たちに恵みを与え続けてくださいます。

きよめられたことのあらわれのひとつは、人間に対する神の御思いを持つことです。主はすべての人を愛しておられます。すべての人が神に心を向けて救われることを願ってくださいます。ヨナはイエスの来臨以前に生きて人ですから、イエスの御名を知りませんでした。とは言え、主の人々への御思いは同じです。それはヨナ書の最後のことばにあらわれています。この言葉はきっと、ヨナの心にも届いたことでしょう。ヨナ4:10-11「4:10 すると、主はこう言われた。『お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。4:11 それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。』」

ヨナが自分の快適さばかり考えていたのがどれほどくだらないことかよくわかります。ヨナが気にしていたのは木のことで、神が気を配っておられたのは、町のことです。ヨナは死にたいと思いましたが、神は死と裁きから多くのたましいを救いたいと考えておられました。右も左もわきまえぬ人間というのは、ニネベの人が道徳的に無知であることを指すという解釈もあります。しかし、もっと直接的な解釈は、本当に右も左もわからない幼い子供たちがニネベに12万人いたという説明です。神が罪のない子どもたちに触れられたことで、ヨナのかたくなな心も溶かされたのではないのでしょうか。著者が神のことばでこの書を締めくくったのは、そのことばから私たちが課題を得るためだと思います。



神は大都市ニネベのことを気にかけておられました。神は私たちの町のことも気にかけておられます。この町には、罪のない子どもはどれくらいいるでしょう。罪を悔い改めなければならぬ大人はどれくらいいるでしょう。大阪は当時のニネベより大きな町です。その周囲には、近畿圏が広がっています。神は私たちをとおして人々に手を差し伸べることを望んでおられます。同時に、神に仕える私たちの心にも働きたいと願っておられます。

神はニネベの人々を愛してくださったように、この大都市にいるひとりひとりを愛してく

ださいます。けれども、ひとりの預言者を送るのではなく、私たち全員をこの場所に召されました。私たちは皆、ヨナです。神はこの町で福音を告げ知らせよう私たちに召しておられます。そんな使命から、私たちも逃げ隠れしたくなることもあるでしょう。すねた態度になることもあるかもしれません。そんなとき神は私たちに問われます。「この大いなる都を惜しまずにいられるだろうか。」

IV. 結び

私たちは皆、この町でイエスの名を告げ知らせよう召されています。それが、OICの存在意義です。また私たちがここにいる理由です。私たち夫婦はもうすぐ大阪を離れるので、タルシシュに逃げていくように見えるかもしれませんが、私の言っていることは場所に関係なくあてはまります。私たちクリスチャンは、地の塩、世の光でなければなりません。どこにいても、イエスの名を告げ知らせるすばらしい特権と責任があります。私たち夫婦はしばらく留守にしますが、大阪が私たちの帰る家であることに変わりはありません。今日でOICの牧師としては最後の日曜日になりますが、私たちは6月に大阪に戻ってきて、この町で主に仕えつづけていきます。最後に、テモテ第一1:15をお読みしましょう。「『キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた』という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。わたしは、その罪人の中で最たる者です。」

V. 祈り